

## 「はたらきかけ」をあらわすシナイカ

齋 美智子\*

### 1. はじめに

動詞の否定疑問形を述語にもつ文が、はたらきかけ文（聞き手にある行為の実現をもとめる文）と、ほぼ同等の力をもつことがある。下のような例である。

- (1) 「凶器の黒い紐を見せてくれませんか」(八ヶ岳)
- (2) 「おい! やめないか!」(華麗な)
- (3) 「どうだ、いっしょに映画に行かないか」(わが町)
- (4) 「よかったら、ここに坐りませんか」(村上龍)

否定疑問形によるはたらきかけの文は、〈依頼〉〈命令〉〈勧誘〉〈すすめ〉などのモーダルな意味をあらわす。

このうち、(1)のように、形態的にクレル・モラエル（およびその敬語体・丁寧体）を含む否定疑問文は、動作主体が聞き手であれば、ほぼ必ずはたらきかけの意味をあらわす。シテクレナイカ・シテモラエナイカなどである。これらは、依頼の表現として固定化したものと考え、考察の対象から外す。

また(2)のような〈命令〉の例は、下降調のイントネーションをもつ・直後の動作しかはたらきかけられない・丁寧体をもたない・「か」を省略できないという、他の意味の例とは異なる特徴をもつ（注1）。使用できる状況は限られているが、これも固定化した表現として除外することにする。

これに対して、(3)(4)のような例は、〈勧誘〉や〈すすめ〉をあらわすということ以外、これまでふれられることが少なかったように思う（注2）。そこで、こうした例にしばって考察をすすめる。

便宜上、クレル・モラエルをとまわず（＝非依頼）、下降調で発話されない（＝非命令）、否定疑問形をシナイカとよぶことにする。(3)(4)は文末の力をとまわなくても、上昇調のイントネーションのみで、もとの文とほぼ同じ意味をあらわすが、この力をとまわらない形もシナイカとよぶ。

そしてこの形を述語にもつ文が、はたらきかけをあらわす場合について考察する。特に〈すすめ〉をあらわす場合に注目する。用例は、現代の小説・エッセイ等から収集した。会話文の文末にあらわれる例のみを扱う。出典は用例末の（ ）内に略記し、本文末に出典一覧を付記する。出典のないものは作例である。

結論を先に述べると、シナイカを述語にもつ文は、条件つきで、はたらきかけ文へ移行する。条件は形態・構文的なもの他、語用論的な要因も関係する。そして、動作主体が一・二人称の時に**〈勧誘〉**、二人称の時に**弱い〈命令〉**をあらわす。二人称の場合は、もともと利益に関して中立的なはたらきかけであるが、聞き手に利益をあたえるような場面で使われると**〈すすめ〉**の意味を実現する。つまりシナイカによって表現される〈すすめ〉は、形式と直接結びついた意味ではない。

なお、表題で「はたらきかけ」をあらわすシナイカとしたが、正確にいうと「はたらきかけ」をあらわすのは、ある特定の条件をみたした、シナイカという形を述語にもつ文である。

### 2. はたらきかけをあらわす場合の、形態・構文的特徴

シナイカを述語にもつ文が、はたらきかけ文へ移行する条件を整理した研究に、于（1984）がある。于は、「うちけしのたずねる文」が「働きかける文」へ移行するには、〔1〕述語が意志動詞 〔2〕二人称の動作である 〔3〕二人称の未来の動作について述べている 〔4〕あい手の未来の意志動作に対する話し手の希望が入っている、の4

キーワード：シナイカ・否定疑問形・勧誘・すすめ・はたらきかけ文

\*平成10年度生 比較文化学専攻

つの条件が必要であると述べている。

本稿では、于の条件に若干の修正を加え、シナイカを述語にもつ文が、はたらきかけをあらわす場合の文法的な特徴として、次の4点を考える。

- ① 述語が意志動詞であること
- ② 動作主体が二人称（聞き手）、あるいは一・二人称（話し手と聞き手）であること
- ③ 動詞が、非過去の否定形であること
- ④ ノ（ダ）・ダロウや、ある種の叙法副詞（まだ・全然など）をとともなわないこと

この他、語用論的条件として、a 事態が未実現であること、b 話し手が事態の実現を望んでいること、c 話し手に聞き手の意向がわかっていないこと、等も必要である。変更した点は、②の動作主体に一・二人称を加えたこと、③を形態から規定したこと、④を追加したことである。于の条件〔4〕は語用論的条件にまわした。以下、①～④の反例をあげていく。

下の例は①に反する。無意志的な動作は、はたらきかけることができない。

- (5) 「眠れませんか？」（中略）亀井が、起き上って、声を、かけて来た。（八ヶ岳）

次の例は②に反する。

- (6) 「佐々木は、まだ、帰りませんか」

開口一番に、それを訊いて、杏子がまだだと答えると、（後略）（花ホテ）

この文は、動作主体が三人称の例である。聞き手に事態の真偽をたずねる文であり、はたらきかけ性はない。なお、于は「2人称の動作であること」を移行の条件にあげているが、下の例のように動作主体が一・二人称の例も、はたらきかけをあらわす。

- (7) 「もし、お差し支えなかったら、お昼に会って頂きたいんですけど。」

「いいですよ。そうだ、いっしょに昼ごはんを食べませんか。」（結婚の）

次に③について。はたらきかける動作は、未来に実現するものである。このため述語の動詞は非過去の否定形をとる（注3）。シナカッタカのような過去形の例は、はたらきかけにならない。

次は④に反する例。ノ（ダ）をとともなう例は、直接的なはたらきかけ性をもたない（注4）。

- (8) 「——お母さん、寝ないの？」（寝台車）

- (9) 「今日は出かけないの？」

ノ（ダ）をとともなうと、「寝ない」「出かけない」という事態の真偽を問う文になる。ダロウでも同様である。このようにナイが否定命題を構成する例は、はたらきかけにならない。また、シナイデスカという形にも、はっきりとはないが、これと類似した現象がおこるようだ。下の例の a b は、はたらきかけ文としての適格性がことなるだろう。

- (10) （椅子をさしめして）〔a 座りませんか・b 座らないですか〕

b のデスは丁寧さをあらわすだけでなく、判断の意味を残しているように感じられる（「座らない」ですか？）。集めた用例中に、はたらきかけをあらわすシナイデスカの例は1例しか見られなかった。

ある種の叙法副詞が共起する例も、否定命題を問いかける文にとどまる。

- (11) 「食事の後お皿を片付けようとして」もう、食べない？」「うん」

- (12) なぜ、学校に行かない？

打消し成分と呼応する叙法副詞「まだ」「全然」「もう」（「もうこれ以上」の意味の「もう」）等が共起する場合は、打消しの意味が固定化されるので、はたらきかけにならない。疑問の副詞「なぜ」「どうして」等が共起する場合は、問かけ文であることが明示されており、はたらきかけにならない。ただし、この場合はノ（ダ）で受けるのが普通である（なぜ行かないの？）。

これらの例の命題部に打消しが含まれることは、返事との対応からもみてとれる。（11）に対して肯定の返事をすれば、それは「食べない」という意志の表明である。他方、下の（13）に対して同じ肯定の返事をすれば、それは「食べよう」という意志の表明であろう。はたらきかけをあらわす時、シナイカは全体で一つの複合辞相当となり、打消しの意味にならない。

- (13) 「夫の帰りが遅い。待つのをやめて子供に」

「そろそろ食べない？」「うん」

はたらきかけをあらわす例は、以上の①～④の特徴をもつ。ただし文法的な特徴をみただけでも、下の例のように、はたらきかけをあらわさないことがある。

(14) [聞き手の前にあるはさみを借りたい。指差して]

「そのはさみ、使いませんか」

(15) [悪事の告白をする前に]「警察に言わない？」

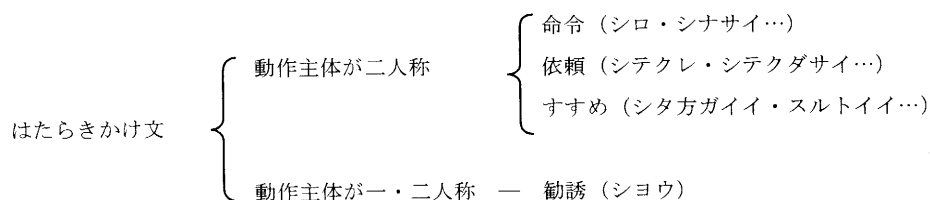
このような例と、はたらきかけの例とは、話し手が事態の実現を望んでいるかどうかという語用論的な条件によってしか区別がつかない。しかし、①～④をみたした例がほとんどの場合はたらきかけの意味をあらわすことや、返事との対応から、シナイカという形式と、はたらきかけの意味との間に、一定の結びつきが生まれていると考える。

### 3. はたらきかけ文の概観

シナイカによるはたらきかけの意味について考える前に、はたらきかけ文を概観しておく。シナイカによるはたらきかけは、〈勧誘〉や〈すすめ〉をあらわすとされている（于（前掲）・姫野（1998））。これらの意味は、はたらきかけ文の中で、どんな特徴をもつのであろうか。

肯定のはたらきかけ文には、動詞の命令形シロ・さそいかけ形ショウを述語にもつ、いわば本来のはたらきかけ文と、他の通達的な文タイプから移行してきたものがあり、全体として体系を形作っている。これを形態と意味の結びつきにより、以下のように分類する。右側（ ）内にそのカテゴリを構成する代表的な形式をしるす。

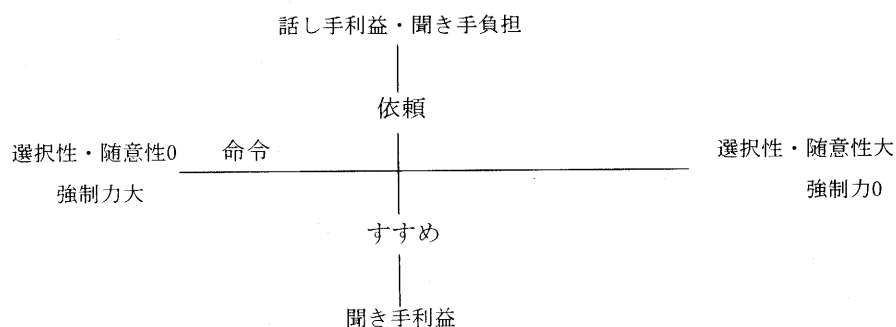
【図1】肯定のはたらきかけ文の下位分類



肯定のはたらきかけは、動作主体の人称によって二つに分類できる。〈命令〉〈依頼〉〈すすめ〉は、動作をおこなう主体が聞き手（二人称）であるものである。一方、〈勧誘〉は、動作主体が話し手と聞き手（動作主体が一・二人称）という特徴をもつ。二人称のはたらきかけを、さらに強制力と利益の方向によって〈命令〉〈依頼〉〈すすめ〉に分類する。

【図2】動作主体が二人称のはたらきかけの分類

（柏崎1993より、一部省略・変更）



〈命令〉は、強制力が大きく利益に関して中立的である。話し手利益であることもあれば、聞き手利益であること

もある。〈依頼〉〈すすめ〉は、命令より強制力が小さい。〈依頼〉は話し手に利益があるはたらきかけであり、〈すすめ〉は聞き手に利益があるはたらきかけである。

ここであげた〈すすめ〉をあらわす文は、もとは当為的な判断や問いかけをあらわす文、および不完全な形の文である。具体的には、シタ方ガイイ・スルトイイ・シタラドウカ・シタラ等の形式を述語にもつ。これらは一定の形態・構文的な条件さえ満たせば、ほぼ必ずはたらきかけの力を持ち、〈命令〉〈依頼〉とは異なる意味、〈すすめ〉を実現する（注5）。本来的なはたらきかけ文とはことなる役割を、はたらきかけ文の体系の中で果たしていると考え、これもはたらきかけ文の下位グループに位置付けておく。

なお、場面や人間関係のような語用論的条件に依存して、命令や依頼の形式が他の意味をあらわすこともある。これは、上の分類とはことなる次元のものとする。

#### 4. シナイカによるはたらきかけ

ここで、シナイカによるはたらきかけの意味に話をもち。動作の主体が話し手と聞き手である場合、シナイカによるはたらきかけは〈勧誘〉をあらわす。これは、シヨウによる勧誘の文とよく似た意味をあらわし、多くの場合いいかえることができる。

(16)「後で二人だけでどこかで飲み直しませんか」(旅人よ)

(17)「こんどの週末、みんなでドライブにでも行かないか」(ここに)

ただし、シナイカによるはたらきかけは、問いかけ文の性質を完全には失っておらず、またシヨウに比べると強制力が小さいという特徴をもつ（注6）。たとえば下のように問いかけが成り立たない場面では、シナイカをもちいてはたらきかけにくい。

(18)「自宅に迎えに来たヤマダさんに」

「まあヤマダさん。わざわざすみませんでした。お待たせしてしまつてごめんなさい。じゃ、行きましょうか」(無印OL)

(19)「ボク、ここで遊んでてもいいかなあ」(中略)

「いいよ、キョウコちゃんもいるから一緒に遊ぼう」(無印良女)

(18)は話し手と聞き手とが一緒に出かけることが自明な場面、(19)は応答場面である。話し手にはすでに聞き手の意志がわかっているの、問いかける形のシナイカをもちいると不自然になる。下のように、はたらきかけの強制力が強い例もシナイカでは不自然である。

(20)「夕立なの」

なあんだというような顔をしているみどりに向つて、宮川が言った。

「山の夕立はすごいんだ。さあ、いそごう、夕立の来ないうちに山をおりよう」(風雪の)

(20)は急いで山をおりなければ危険な場面であり、聞き手に「急がない」「山をおりない」という選択肢をあたえることは常識的に考えられない。このようなシヨウによる勧誘とことなり、シナイカによる勧誘では、聞き手の意志をたずねる形に由来して、聞き手にその行為をするかしないか選択する自由がある。

次に動作主体が二人称の例を見つめる。下は、聞き手に利益があるので〈すすめ〉の例と思われる。

(21) 百子と麻子がそれを見ていると、向こうの長椅子から、大谷が立つて来た。

「どうぞ、おかけになりますか。」「いいえ、結構ですわ」(虹い)

(22)「宿を捜しているんでしょう？」

「そう」

「じゃあ、きたないとこだけど、私んちにいらっしゃいますか」(後略)」(貧乏)

姫野(前掲)は、二人称の時シナイカが「勧め」をあらわすと述べている。しかしシナイカによる二人称のはたらきかけは、必ずしもすべてが〈すすめ〉をあらわすわけではない。下は聞き手利益ではなく〈すすめ〉と解釈しにくい例である。

(23)「恐喝の証拠物件を見つけれ、取り上げられて」

大沼は苦虫をかみつぶしたような顔で、

「それを売らんか？ いくらでも出す」(華麗)

## (24) 「もっとこっちへ寄らないか」

忠彦が、律子の肩に手を廻して引寄せた。酔いの廻った軀は、頼りないほどあっけなく忠彦の胸に倒れかかった。(酔橋)

本稿では、シナイカによるはたらきかけが、もともと利益に関して中立的である、と考える。なぜなら、シナイカによって表現される〈すすめ〉は、場面の助けを借りて〈すすめ〉の意味を実現しているのであって、単独では聞き手利益の特徴をもたないと考えられるためである。以下に説明する。

## 5. 〈すすめ〉の2つのタイプ

〈すすめ〉をあらわす文には、2つのタイプがある。一つは動作主体の人称などの文法的な条件をみたせば、基本的に〈すすめ〉をあらわすものである。3節で述べたシタ方ガイイ・スルトイイ・シタラドウカなどの形式によるものがこれである。もう一つは、もとは〈命令〉や〈依頼〉をあらわす形式が、特定の場面・文脈において〈すすめ〉をあらわすものである。「どうぞ、お食べください」「ぜひ遊びにいらっしゃい」などの例がある。後者が〈すすめ〉をあらわす条件は文法的な条件ではない。場面・文脈といった語用論的な条件による移行である。下に例をあげる。(25) (26) は形式と結びついた意味である〈すすめ〉、(27) (28) は語用論的な条件に依存する〈すすめ〉である。

## (25) 「身体の震えがとまらない」

「本当にどうしたんでしょう。どうしても止まらないわ」

「寝るといい。ここでいいから暫く静かに横になってて御覧」(いと)

## (26) 「奈良で、タクシーの運転手と客の会話」

「法隆寺をごらんになって、それから法輪寺、法起寺と廻られたらいかがですか。みんな近いところにかたまっております」

「では、そうして下さい。(後略)」(燭台)

## (27) 「どうぞおあがりください。汚い家ですけど」

「失礼します」(水中)

## (28) そこへ、ソバ屋が、あつらえたものを持ってきた。「こんなところで、なんにもございません。どうか、のびないうちに、あがってください」行介は高子に勧めた。(波)

この2つの〈すすめ〉は聞き手利益という点では共通するが、ことなる意味特徴をもち、互いにいいかえることができない。(25)(26)は依頼の形式ですすめられない。もし依頼の形式をもちいれば、〈すすめ〉ではなく〈依頼〉をあらわす文になる。一方(27)(28)のような場面では基本的にシタ方ガイイ・シタラドウカ等は使われない。前者を「助言型すすめ」、後者を「申し出型すすめ」となづける。

シタ方ガイイ・スルトイイ・シタラドウカ等による「助言型すすめ」は、文法的条件さえみたせば、場面の助けがなくても、さまざまな行為をすすめることができる。これは「聞き手にとっていい」と判断したことをすすめるものである。

一方、「申し出型すすめ」は場面・文脈に依存した特殊なものである。具体的には、話し手の所有物である椅子をすすめる、話し手の提供した食べ物・飲み物をすすめる、話し手の部屋に入るようすすめるなどの場面であられ、使用場面は限られている。これらの場面では、聞き手にとって望ましいと思われる行為の決定権を話し手がもっている。聞き手は、話し手の許可なしにはその行為を行えないような心理的・社会的制約を受けているのが普通である。その行為をはたらきかければ、聞き手に利益をさしだすことになる。

「助言型すすめ」と「申し出型すすめ」とを、次のように定義する。

助言型すすめ : 聞き手にとって望ましいと話し手が判断した行為をはたらきかけるもの。利益は、すすめ手があたえるのではなく、当該行為の遂行によってえられる。

申し出型すすめ : 聞き手にとって望ましいであろう行為の決定権が話し手に属する時、その行為をするよう聞き手にはたらきかけるもの。話し手の好意の提供をとめない、それが聞き手にとっての利益となる。

## 6. シナイカによる〈すすめ〉

シナイカに話をもどす。シナイカによる〈すすめ〉は、「申し出型すすめ」の特徴をもっている。先の(21)は話し手が椅子をゆずっており、(22)は聞き手を自宅に招待している。いずれも、話し手が利益を提供していると解釈できる。そして、同じ聞き手に利益があるはたらきかけでも、「助言型すすめ」はシナイカによって表現しにくい。下のような助言の場面では、シナイカの使用がやや不自然である。

(29) [風邪をひいた部下に]

「早く [帰って寝たほうがいい・?帰って寝ないか? ]」

(30) 「雨が降りそうよ。傘 [持っていったら?・?持っていないか? ]」

「申し出型すすめ」は、はたらきかけの文が、聞き手に利益を提供する場面で発話される時に生まれる意味である。場面の助けがなければ〈すすめ〉をあらわさない。このことは、シナイカも言語外の要因に依存して「申し出型すすめ」の意味をえていることを示唆する。そして実際、〈すすめ〉をあらわさない例も見られる。そこで本稿では、シナイカが二人称の時、もともと利益に中立的なはたらきかけ、すなわち弱い〈命令〉をあらわすのではないかと考えるのである。

ところで、シナイカに〈すすめ〉の例がめだつのは、次のような理由によるのではないだろうか。

一つは、依頼をあらわす否定疑問形 (シテクレナイカ・シテモラエナイカ等) との使いわけがされているという可能性である。つまり、クレル・モラエルを含む場合は〈依頼〉をあらわし、シナイカの場合はそれ以外の意味を担当する。問かけ文に由来して強制力が弱いので、本来の意味での〈命令〉はあらわさない。そこで〈すすめ〉をあらわす例が多いように感じるのではないか。

また、シナイカによるはたらきかけの語用論的特徴が、〈すすめ〉(特に「申し出型すすめ」)をあらわしやすくしているという可能性もある。シナイカによるはたらきかけの力は、聞き手の意向をたずねるところから生まれ、それが形式に定着したものと考えられる。このため、シナイカではたらきかけることのできる動作には、かたよりのある。

用例をみると、話し手が何らかの形で聞き手の動作に関与する例がめだつ。たとえば、話し手に向かう方向性のある事柄 (話し手の領域に来る・寄る・入る・話してみる…)、話し手から聞き手に何かが移動する動作 (話し手のものを買う・食べる・持っていく…)、話し手と一緒に起こす動作 (会う・結婚する・一緒にどこかへ行く…)が多い。

(31) 「(前略) どこで落ちあいましょう」

「このあいだは、あなたの部屋へお邪魔したから、こんどはわたしのところへいらっしゃらない?」(侵入者)

(32) 「(前略) それにしても、不便だね。障子越しに話をしているのは」

「ほんとに」

「出て来ないか、ちょっと」(遠い海)

(33) [セールスマンが壺を出して] 「この壺をお買いになりますか」

話し手の関与のしかたはもっと間接的・抽象的であることもある。下の(34)の例では女性を紹介する、(35)の例では発話者が本作りに関わるという形で、話し手がその事柄に間接的に参加する。女性を紹介できない場合や、本の出版に協力できない場合には、シナイカですすめられないだろう。

(34) 「俺の会社にな、ものすごい美人がいるんだ。年は多少食っているが、頭のできもいい。どうだ、いっぺん逢ってみないか」(尋ね)

(35) 妻が本を書いたのは、彼女のちょっと異常とも思えるほどの野の花に対する思い入れを、私のところによく出入りしている編集者が知ったからだった。編集者の「本を書いてみませんか?」という申し入れに、妻ははじめひどくためらっていた。(続・岳)

上の例のように話し手が関わる事柄の場合、聞き手の意志の決定は話し手の意向と無関係ではない。そして、聞き手の意向を問うことが話し手の意向 (壺を買ってほしい・女性を紹介するなど) を伝えることになり、はたらきかけの意図へと結びつく。聞き手に利益を提供する例が多く、その場合は「申し出型すすめ」をあらわすが、すべての例が「申し出型すすめ」なのではない。(たとえば(32)(33)は「申し出型すすめ」ではないだろう。

これらの例は〈依頼〉とも〈すすめ〉とも解釈できる。）

これに対して、話し手がまったく関わらない動作（聞き手のみの意志で実現できる動作）の場合、聞き手の意向をたずねる形で、はたらきかけをおこなうことは、非礼になったり、あるいは唐突すぎて意図が伝わらなかったりする。

(36)〔テレビを見ている息子に〕「勉強しない？」

(37)〔知らない人に道を聞かれて〕

「さあ、わかりません。あそこの交番で聞きませんか？」

上の例が不自然なように、シナイカによって、はたらきかけられる事柄には制限がある。ただし、聞き手のみで完結する動作であっても、もくろみ動詞の否定疑問形シテミナイカの形をとって、聞き手の意向に言及する非礼さ・唐突さをやわらげることがある。この場合、はたらきかけの力は弱い。

(38)〔聞き手に不倫をするようそそのかしている。ヒルダは部長夫人の名〕

「君ひとつ、部長を誘惑してみない？ ヒルダの鼻をあかしてやれよ」（海と）

以上のように、シナイカによるはたらきかけは、話し手がその事柄に関わるという特徴をもつことが多い（注7）。そして、この語用論的特徴が「申し出型すすめ」をあらわしやすくしていると考えられる。しかし、話し手が動作に関わることは、聞き手利益とイコールではない。また、聞き手のみで完結する動作をはたらきかける例も少ないながら、あらわれる。その結果、すでに見たように、〈すすめ〉をあらわさない例が見られるのであろう。

## 7. まとめ

以上をまとめる。シナイカによるはたらきかけの文は、動作主体が一・二人称の時（勧誘）、二人称の時、弱い（命令）の意味をあらわす。二人称の場合は、もともと利益に関して中立的であるが、場面や状況に依存して〈すすめ〉をあらわすことがある。ただし、この〈すすめ〉は、話し手が聞き手に利益を提供するという特徴をもつ「申し出型すすめ」である。シナイカが「申し出型すすめ」になる時には、話し手が、間接的な形にせよその事柄に関わるという語用論的条件が、最低限必要である。

シナイカによるはたらきかけは、問いかけ性を媒介にしており、質問の成り立たない場面ではもちいることができない。この他、はたらきかけることのできる動作に制限がある点、同形の問いかけ文が存在し、それとの区別が文脈によってしか、わからない場合があることから、はたらきかけ文への移行は、条件付きのものとする。

## 主な参考文献

- 柏崎雅世 (1993) 『日本語における行為指示型表現の機能—「お～／～てください」「～てくれ」「～て」およびその疑問・否定疑問形について—』くろしお出版
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎ほか (2000) 『日本語の文法』講義テキスト
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉選書
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 安達太郎 (1995) 「シナイカとショウとショウカー勧誘文—」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』宮島達夫・仁田義雄編 くろしお出版
- 于日平 (1984) 「「うちけしのたずねる文」から「働きかける文」への移行について」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所
- 姫野伴子 (1998) 「勧誘表現の位置—「しよう」「しようか」「しないか」」『日本語教育』96 日本語教育学会
- 齋美智子 (1999) 「働きかけ文における「勧め」」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化論叢』1

## 出典一覧

( ) 内は文庫の出版年

- 『波』山本有三 (1954) 新潮文庫
- 『わが町の物語』源氏鶏太 (1956) 集英社文庫
- 『いとしい恋人たち』佐多稲子 (1959) 角川文庫
- 『海と毒薬』遠藤周作 (1960) 角川文庫
- 『虹いくたび』川端康成 (1963) 新潮文庫
- 『宇宙のあいさつ』星新一 (1977) 新潮文庫
- 『燭台』井上靖 (1978) 文春文庫
- 『風雪の北鎌尾根・雷鳴』新田次郎 (1978) 新潮文庫
- 『続氷点 (上下)』三浦綾子 (1978) 朝日新聞社文庫
- 『結婚の条件』源氏鶏太 (1981) 集英社文庫
- 『遠い海』井上靖 (1982) 文春文庫
- 『水中花』五木寛之 (1982) 新潮文庫
- 『旅人よ ロン・コン 〈母の川で唄え〉』胡桃沢耕史 (1985) 徳間文庫
- 『花ホテル』平岩弓枝 (1986) 新潮文庫
- 『華麗なる探偵たち』赤川次郎 (1986) 徳間文庫
- 『猫の事件』内「貧乏ゆすり」阿刀田高 (1987) 講談社文庫
- 『狼は月に吠えるか』内「侵入者」都筑道夫 (1987) 文春文庫
- 『母の部屋』内「酢橘」津村節子 (1987) 集英社文庫
- 『無印良女』群ようこ (1988) 角川文庫
- 『ハヶ岳高原殺人事件』西村京太郎 (1989) 徳間文庫
- 『続・岳物語』椎名誠 (1989) 集英社文庫
- 『尋ね人の時間』新井満 (1991) 文春文庫
- 『無印OL物語』群ようこ (1991) 角川文庫
- 『寝台車の悪魔』赤川次郎 (1991) 光文社文庫
- 『村上龍料理小説集』村上龍 (1991) 集英社文庫
- 『ここに地終わり海始まる 上下』宮本輝 (1994) 講談社文庫



## 注

- 注1) 命令の用法について田野村 (1990) は、相手が～しようとししない事実を受け、それを表現する否定表現「～しない」に「か」を加えて表出するもの、と説明している。そして、「相手が～しないこと」への非難から、はたらきかけの意味が生まれることを示唆している。スルカにいいかえられない点において、ナイが否定命題を構成するという否定辞本来のはたらきを残しており、他の意味の例とは、はたらきかけをあらわす仕組みがことなる。著者もこの考えを支持する。
- 注2) シナイカがはたらきかけをあらわすことは、鈴木 (1972)・仁田 (1991) 等に指摘がある。この他いわゆる勧誘表現のシナイカと、シヨウ・シヨウカとの比較を試みた研究として、安達 (1995)・姫野 (1998) がある。
- 注3) 完成相の否定形がほとんどである。命令形やさそいかけ形では、状態の持続をはたらきかけることができる (寝テイロ・寝テイヨウ) が、シテイナイカという形で、はたらきかけをあらわす事例はなかった (?寝テイナイカ)。
- 注4) 間接的に、はたらきかけの力をもつことはある ([子供に] まだ寝ないの?)。これは、人間関係や場面などの語用論的要因に依存するところの大きいのはたらきかけと考える。
- 注5) 移行の条件については、齋 (1999) 参照。
- 注6) 問いかけが成り立たない場面でシナイカがあらわれないことは、安達 (1995) に指摘がある。本稿では、問いかけ性がなければナイが打消し本来の意味をあらわすために、はたらきかけをあらわす場合においても、シナイカは問いかけ性を完全には失うことができないのだと考える。スルカとシナイカのどちらをもちいても、聞き手の意向を問うことに変わりはないが、わざわざ打消しの形を使うことで特別な意図 (話し手の期待等) を表現できるのは、問いかけ文に特有の現象である。もし、力が間接性を示す手段となり、問いかけ文でなくなれば、スル (みとめ) - シナイ (打消し) の対立はよみがえる。そして否定命題をさしだすだけでは、聞き手に、はたらきかけることができない。このため、問いかけが成立しない場面では、一下降調の命令のシナイカをのぞいて - シナイカをもちいてはたらきかけることができないのだと考える。
- 注7) 〈勧誘〉の場合は、必ず話し手との関わりが生まれるので、二人称のシナイカのような制限がない。

### 附記:

本稿の内容は、国語学会2001年度春季大会 (2001年5月20日) での報告に基づく。

(2001年12月14日受理)

## Directive Sentences Expressed by Shinaika

SAI Michiko

This paper aims to describe the characteristics of directive sentences using *shinaika* (negative interrogative verbal forms). The sentences in which the predicate is *shinaika* are used as directives in the following conditions:

- 1) The verbs are volitional verbs.
- 2) The tense is non-past.
- 3) The agent is the addressee, or the speaker and the addressee.
- 4) *Noda*, *darou*, or negative polarity items do not occur.

In those conditions, the sentences in which the predicate is *shinaika* express modal meanings, such as “*kan'yu*”, “*meirei*”, or “*susume*”.

The directive force of these sentences arises from asking the hearer if s/he performs the act described. Consequently the situation in which *shinaika* can be used is restricted. For example, *shinaika* is seldom used for an act the hearer can perform without the speaker's participation, because it is not obvious whether the speaker is just asking a question or expecting something from the hearer. On the contrary sentences using *shinaika* make it easy to interpret the sentences as directives that the speaker joins or supports, or through which s/he allows the act. And, this pragmatical character of directive sentences in which the predicate is *shinaika* relates to the meaning of “*kan'yu*” and “*susume*”.

Key word: *shinaika*•directive sentences•negative interrogative verbal forms